

進み続けるために



毛利恵美子

九州工業大学大学院工学研究院物質工学研究系
[804-8550] 北九州市戸畑区仙水町1-1
准教授, 博士(工学).
専門は高分子化学, コロイド化学.
<https://www.che.kyutech.ac.jp/chem28/members.html>

この10年ほどで女性研究者の活躍が身近に感じられることが多くなった。一方で、若い世代の男性と話をすると、「働く女性を伴侶とした男性」のロールモデルは案外見えにくく、試行錯誤しているようである。女性の社会進出にともなう課題を女性特有の問題と捉えず、若い世代の男性にとっての関心事でもあることは、新しい時代を予感させる。そこで、本稿では、「女性研究者を伴侶とした男性」である夫のことも含めてわが家の事例について綴ってみたい。

私と夫は高分子系の同じ研究室の出身である。私が先に北九州市にキャンパスのある九州工業大学に就職し、夫は数年後に九州南部に拠点のある企業に就職した。週末には数時間かけて往來する生活の後、結婚をきっかけに夫が退職した。決して積極的に退職したかったわけではないと思うが、夫は「再就職するとしたら男性のほうが有利だから」と言い、北九州市で暮らすことになった。2人の子供に生まれ、夫は転職し会社勤めも経験したものの、夕方以降のみ塾講師として勤務するという生活に落ち着いた。これは、「小学1年生の壁」と世間で言われるものに関係している。保育園は18時まで見てもらえるものの、小学生になると途端に下校時間が早くなり、家に誰か居る必要が出てきたためである。子供の年齢に合わせたその時々夫の判断のおかげで、家族全員揃って夕食を食べることが習慣となって15年以上も継続している（なお、夕食の大半は夫が調理している）。

一方で私の職場での環境はと言えば、第二子の育休明けの2011年度末には所属研究室が閉鎖になるという事態となった。学科の先生方のご助力で、新しく来られた無機系の教授の研究室に所属する助教となったものの、新設の研究室では毎年学部4年生が入れ替わるばかりで大学院への進学者は少なく、自分のテーマどころではないという日々が続いた。次女が小学校に上がった2018年頃になって、遅ればせながら自身の将来のことを考えなくてはいけないと思うようになった。同じ年に新しいテーマで科研費を得たので（その分野

の実績がまったくなかったのに！）学生を1人つけてもらい、平行して過去のデータを発掘して論文を書いた。なんとか2020年に准教授となり、これでやっと研究に専念できると思ったのだが、学内業務や学会運営など、盛沢山の役割が待ち構えていることを知って愕然としつつなんとか頑張っている。

以上のような経緯で結果的に20年ほど大学教員として過ごしたことになるが、いくつか世間で言われていることとは違うと思うことがある。一つは、誤解を恐れずに言えば、「案外“マミートラック”は悪くない」ということである。マミートラックとはいわゆる出世コースから外れてキャリアが停滞してしまう経路を指す。私は、結果的に准教授になるまでに16年かかっており、マミートラック的経路にいとみなされただろう。昨今の任期制ではこのようなルート自体が存在しない場合も多く安易に勧めることはできないが、娘たちが十代になり夕食を一緒にとれる時間も残り少なくなった今振り返ってみると、この時間が必要だったと強く感じる。気長に“放牧”しておいてくれた周囲には感謝するばかりである。もう一つは、思っている以上に自由にできるものだという事。大学での専攻とは異なる分野でも、やってみればなんとかなることも多い。私の場合は、必要に迫られその時々で勉強した。その時点では遠回りをしているようにも思えたが、結果的に自身の新しいテーマにもつながったと思う。夫も、子供たちが独立した後の生活を見据えて、新しい分野の勉強を始め、昨年は簿記の資格を取得した。現代は、個人の志向が多様化しており、上の世代が是としたことを希望していないということも多い。黙っていてもわからないし、悪意なく決めつけられることもある。だからこそ、ぜひ自らの希望を口に出してみしてほしい。どこかで誰かがその声をキャッチしている可能性が高い。そして、本気で望んだことは案外実現するものだからこそ、自分が何を望むのかは周囲に流されずによく考える必要がある。